

月刊

# いじろのとも

第十三卷

六月号

## 社会崩壊の原因

日本社会が  
崩壊の危機に  
瀕している  
その原因は  
民主主義が  
未成熟だからではなく  
それが  
行き過ぎているのと  
信仰が  
失われて  
他己が  
萎縮してしまった  
からなのだ

でも  
誰も  
それに  
気づかない

## 一番失ったもの

稲盛和夫氏は  
起業家には  
危機感と興味・探求心が  
大切という  
でも  
それは  
いま  
日本人が一番  
失っているもの

# 人生を考え直して

## みたい人は（一〇一）

空海『即身成仏義』解説（四）

（二）即身成仏の偈頌（げじゆ）  
是の如くの経論の字義差別、云何（いかん）。  
頌に曰く

六大無礙（むげ）にして常に瑜伽なり 体  
四種曼荼各々離れず 相  
三密加持すれば速疾に顕わる 用（ゆう）  
重重帝網なるを即身と名づく 無礙  
法然に薩般若（さはんにゃ）を具足して  
心数（しんじゆ）・心王、刹塵に過ぎたり  
各五智・無際智を具す  
円鏡力の故に実覚智なり 成仏

参考までに、現代語訳として『弘法大師空海全集第二  
巻』（筑摩書房刊）の中の松本照敬訳を引用させて頂き  
ます。

「 \* \* \*

それでは、右のような經典や論書などに説かれる「即  
身成仏」という四文字の意味、あるいは、「即身」と「成  
仏」の意味の相異はどのようであるか。

詩にいう。

〔1 即身の詩〕

宇宙のいのちの六大（六つの粗大なもの）は、さえ  
ぎるものがなく、永遠に結びつきあい、とけ合っ  
ている。 体

四種類の曼荼羅、それぞれは、真実相をあらわして、  
そのままに離れることがない。 相

ほとけとわれわれとの三密が、不思議なはたらきに  
よって、応じ合うとき、すみやかに、さとのり世界  
が現れる。 用

あらゆる身体が帝網（たいもう）の珠（たま）さな  
がらに照り合うのを、名づけて即身（この身のまま）  
という。 無礙

〔2 成仏の詩〕

あらゆるものは、あるがままに量り知れないほど多  
くの仏のすがたをしていて、薩般若（さはんにゃ）  
をそなえている。

すべての人びとのおのにおのに、心数（しんじゆ）と  
心王（しんのう）がそなわっていて、数がぎりなく

存在する。

心数、心王のそれぞれに、五つの智慧と際限もない智慧がそなわり、欠けることがない。

その智慧をもつて、すべてを明らかな鏡のように照らすとき、真理にめざめた智者となる。 成仏

\* \* \*

今回は、原文はましでのこと、補足的・解説的な現代語訳を読まれても、おそらくは、よくご理解いただけなのではないでしょうか。

実は、この『即身成仏義』は、このあと、この八行からなる偈頌（げじゅ）の一つ一つの解説をめぐって展開されて行きます。ということは、その解説を読んだとき、はじめてそれぞれの意味が理解できるというわけです。ですから、ある意味で、分からなくても当然と言えるのです。

ということ、ここでは、最小限度の解説のみをしておきたいと思います。

まず、この偈頌の最初の四つでは、「即身（この身のまま）」とは何かが説かれています。

言うまでもないことですが、私たち人間も、他の動物と同様に、肉体をもっていて、それによって生命を保っています。それは、自然環境の中に存在し、それに

依存して生きているということです。ですから、私たちが「身」、つまり身体をもつということは、自然という物理的法則の中に共存しているのです。

物質も、私たちと同様に、相対・有限・時間的な存在として、この世に「いのち」（現代語訳では、宇宙のいのち）を贈られているのです。その贈り主を真言密教では、大日如来としているのです。

その「いのち」の原理を密教では、ここに出てきましたように、どこまでも「象徴的」に「六大」で表しているのです。それらは、ここでは出ていませんが、地・水・火・風・空・識の六つです。前の五つは物理的なもの、残りの識は、人間に固有な精神活動です。

考えてみますと、物理的な現象（や概念）である前の五つは、私たちの生活や活動に直結し、肌で直接ふれることができるものです。こうしたものを、原理とすることで、密教の考え方やさとの内容を、少しでも身近に理解してもらえるように、と配慮されているのだと思います。

こうした六大が、「無礙にして常に瑜伽なり」といいますのは、私たちが住むこの世（世界・宇宙）が、私たちを含めて渾然一体として統合がとれている、と考えているということです。それが、この世のあり方の根本原

理（本質・本体・実体・体性）である、ということなのです。それを簡略に「体」と呼ぶのです。

私たちの身体も、そうした存在の本質をもっている、つまり、渾然一体として統合がとれた世界の中に含まれているのだということなのです。

そうした本体・本質を表現するものが、曼荼羅なのですが、それには、ここにありますがように、四種あるという事です。そして、その現れを「相」と呼んでいるのです。その意味するところは、「体」の様相とか相貌とか、あるいは、すがた、かたち、といったことです。

ここでは出されていませんが、四種の曼荼羅とは、大曼荼羅、三昧耶（さんまや）曼荼羅、法曼荼羅、羯磨（かつま）曼荼羅、の四つです。

これらは、みな聞きなれない言葉だと思えますが、そんなものがあるのかなあ、といった理解で流しておいて頂きたいと思えます。あらためて「曼荼羅とはどんなものなのか」につきましたは、だんだんと詳しく述べて行きたいと思っています。ここでは、ただ名前をあげるに止めておきます。でも、それらを全く見たことのない方のために申しますと、曼荼羅は、たくさんの仏さんが描かれているものだ、と思っておいて頂きたいと思えます。

次に、「三密加持すれば速疾に顕わる」ですが、この

「三密加持」につきましては、四月号で詳しく述べましたので、ここでは省略させて頂きます。ご参照下さい。この文の最後に「用（ゆう）」という文字が書かれています。これは、「はたらき、作用」を意味します。三密加持すれば、「この身のまま」にさとりの世界が現れるという、心の「はたらき」を私たちはもっている、ということなのです。

四月号の復習になりますが、私の理論で言いますと、「髓（ずい）（＝無意識または潜在意識）」に宿した、「自分が生きようとする力（＝生命力あるいは煩惱とも呼べるもの）」と「他者を求め愛そうとする力（＝慈悲の心あるいは如来蔵・仏性）」との髓における統合を、この「用（ゆう）」によって為した状態が、実は、次に出てきます「重重帝網なるを即身と名づく 無礙」ということなのです。

その状態のとき、前に戻りますが、「六大無礙にして常に瑜伽なり 体」ということが、実感として分かるのです。そこでは、あらゆる存在が、自分と一体であり、全ての存在が、「法身仏（＝大日如来）」の自己顕現である、腹の底から実感できるのです。

次いで、後半の「2成仏の詩」に移りたいと思えます。この部分にも、幾つかなじみのない言葉があります。

まず、「薩般若」ですが、これは昔のインド語（＝梵語）の音写からきています。「一切の智慧」という意味です。一切智と呼んでいます。

「法然に薩般若（さはんにや）を具足して」とは、私の理論では、あらゆる人は「他己」の髓識に如来を宿して、それが「自己」の髓識の生命力と一体となれば、まさに仏の一切の智慧（全智全能）を体得することができる、ということを表しています。でも、それは実は哲学では論理的には、否定的に、矛盾として「無知の知」とか「無為而無不為」と表現されているのです。何故なら、それは、哲学という意識的な分別や肯定的な論理を超えている、つまり、修行を重ねて経験する以外に知る方法がないものだからなのです。そういう体験をした人だけが、こうした矛盾した言葉の真の意味を知ることができるのです。

次に解説がある言葉に、「心数心王（しんじゆしんのう）」があります。心数とは、心の働きをいい、心所（しんじよ）とも訳されています。心王とは、心の主体で、心のそのものを言います。私の言葉では、「精神の働き」と「精神そのもの」ということになります。

次に「五智」ですが、三月号で「十六大菩薩」を解説しましたが、そこで 法界体性智（大日如来）、 大円

鏡智（阿しゆく如来）、 平等性智（宝生如来）、 妙觀察智（無量寿如来）、 成所作智（不空成就如来）が出てきました。なお、括弧内はその智慧を担う如来です。こうした智慧が、どこから来るか真言密教には説があるのですが、ここでは、私の理論で説明しておきます。

まず、法界体性智ですが、これは、これまでの説明でお分かりと思います。髓識（無意識・潜在意識）での自己と他己の統合によつて得られる智慧です。ソクラテスでは「無知の知」、老子では「無為而無不為」、知に即して言いますと「無知而無不知」です。それは、「知ること無くして、知らざること無し」という境地です。これを傲慢と思える人は、自分がそうなのです。

は、意識水準での智慧です。これらは、法界体性智が体得されたとき、必然的に意識水準で達成される智慧です。 は「こころ」の働き、 は「からだ」の働き、 は「あたま」の働き、 は「たましい」の働き、によつてそれぞれ達成されると考えます。

最後の「円鏡力の故に実覚智なり 成仏」ですが、成仏（＝解脱）の故に、これらの五智・無際智によつて、「現実・実際あるいは真実を覚る智慧（＝解脱知見）」が得られるということです。逆に、実覚智が得られていれば、成仏しているともいえますが。

## 自作詩短歌等選

### 凋落一途の日本

政治・行政  
企業・経済  
文化・教育

どれをとっても

どんどん

落ちぶれていく日本

行き着くところまで

行かねばならない

ということなのか

### 妻も働ける環境

国民生活白書がでた  
いまになってやっと

妻も働ける環境を  
という

少子化の大きな原因に

なってきたことに

気づいていたのか

といたい

若者を優遇する政策を

とつても

票に結びつかない

ということ

### 最後の一人になるまで

フランスでは

在仏ユダヤ教徒と

在仏イスラム教徒が

対立を深めている

という

イスラエルと

パレスチナの

敵対行為の

あおりを受けて

民族の恨み

異教徒の排除

最後の

一人になるまで

やりなはれ

でも

それで

分かったのでは

遅すぎるぞ

よく考えてみる

### 精神病理も追いつく

大都市を中心に

メンタルクリニックが

激増している

という

世界一

規範崩壊が進んでいる

日本だが

精神病理も

アメリカに

追いつく勢いらしい

## 信仰を失った哀れな国

国際通貨基金（IMF）の  
統計によれば

一年の経済成長率で

マイナスなのは

日本だけ

さらに

二年の予測でも

マイナスなのは

日本だけ

完全に世界に

取り残され

凋落していく日本

戦後

連合軍によって

完全に信仰を

失わされた

哀れな国

日本

よくなりそうな

条件は

どこにもない

## 政治家の不正

誰でもが

たたけばほこり

でる身でも

スケープゴート

出さねばならず

## 自己陶醉に依存

MDMAと

（通称エクスタシー）

覚醒剤の混合錠剤の

押収量が

二年間で三十二倍に

激増したという

若者に広がる

薬物・酒依存症

真に

依存するものを失い

自己陶醉に依存する

薬物・酒だけではない

カラオケ・音楽

単車・自動車

セックス

シンナー

踊り・ダンス

などなど

## 奉仕活動の強制

中央教育審議会は

奉仕活動の義務化は

あきらめたが

入試や就職時に

それを

評価するよう

求める提言をした

はたして

これで

子どもたちが

真の奉仕活動を

するようになるのか

私には

逆効果のように

思えるのだが

# 自作随筆選

## 自国中心主義の米国！？

五月十二日付けの毎日新聞に、次のような見出しの記事が載りました。「米ここでも自国中心」「未成年の中間問題 道徳論で欧州と対立」と。

この見出しの中の「ここでも」の「ここ」とは、ニューヨークで開かれた国連子供特別総会のことです。この総会では、「子供にふさわしい世界」と題する成果文書が採択されましたが、この総会で最も話題になりましたのは、「米国がここでも自国中心主義の姿勢を示し、欧州など他の参加国を最後まで振り回した形になった」ことになったようです。どんな問題で米国と欧州が対立したのかということですが、新聞は次のように報じています。

「例えば、米国は草案で『リプロダクティブヘルス・ライツ（性と生殖に関する健康と権利）』に触れた部分に、未成年の女性の中絶を容認するニュアンスが含まれていると指摘し、削除を要求。トンプソン米厚生長官は、若者の妊娠を防ぐために子供たちに禁欲を説くよう訴えて各国代表をあせんとさせた。／この結果、米国とバチ

カン、イスラム諸国が歩調を合わせて欧州と対立するという珍しい光景が出現することになった。NGOの間に『米国の攻勢で文書の調子が弱くなった』という不満の声がくすぶっている」と。

これを読まれて、みなさんはどんな印象を持たれたでしょうか。私は、正直いって、驚きました。この記事の扱いにもそうですが、内容が全くの驚きです。

私には、米国の厚生長官が訴えていますように、「若者の妊娠を防ぐために子供たちに禁欲を説く」ことは、極めて正常であって、それにあぜんとした「各国代表」のほうに、倫理観・規範性を喪失していて、私は、逆に、「あぜん」としてしまいました。

日本の新聞記者が、欧州人と同じで、「禁欲」を説くことなど、時代錯誤も甚だしいと思うであろうことは、十分、予測がつくのですが、欧州までもが、ここまで、墮落しているとは、思いませんでした。米国の方がはるかに正常な社会であることを、再確認する思いです。

日本の性道徳の乱れは、世界一だ、と私は思っています。恋愛小説・不倫小説の異常な売行き、エロ週刊誌やエロマンガ・少女誌の隆盛、中高生の援助交際、世界にない日本発の少女ポルノ、外国への売春ツアー（アジアの発展途上国の売春婦の八十〜九十%の客が、日本人）、

主婦の不倫の一般化、などなどその例の枚挙にいとまがありません。

欧州は、ここまでは行っていないと思うのですが、でも、その乱れは相当のようだ、今回、認識を新たにいたしました。

そういえば、かつて、イタリアに旅行した若い女性数人のグループが、男性に声を掛けられて、その人のアパートへ付いて行き、輪姦された事件がありました。いま、そのことを思い出します。その時の男性の言い分は「このこ付いて来る以上、和姦が成立したと思って当然だ」というものだったように記憶しているのですが、その時、ヨーロッパ人の性の乱れを強く感じました。その当時、「エマニュエル夫人」という題の映画があつたように思うのですが、その内容は、性は楽しめば、誰とであつてもよいのだといった印象をうけました。ヨーロッパ人にとって、性は、食事を共にしたり、テニスを一緒にしたりすると、それほど変わらないことなのかと思っていました。でも、日本は、いまやそれ以上になつていくように感じられます。

ヨーロッパの性の乱れで、もう一つ思い出されますのは、もうかなり前になると思いますが、エイズがはやりだしたころ、確か北欧の、若いエイズに感染した女性が、

エイズ感染防止のキャンペーンに日本に来て、テレビに出演し、言っていた言葉です。それは、「どんなに信頼している恋人でも、セックスをする時は、必ずコンドームをつけさせましょう」というものでした。

アメリカ並の性の倫理があるとなれば、「結婚するまでは、誰ともみだらなことはしないようにしましょう」というものになるのではないのでしょうか。私は、それを期待していました。

アメリカの性倫理の厳格さについてあらためて思い出されますのは、日本と諸外国の青年たちの意識調査をしたとき、アメリカでは援助交際について質問することすら許されなかつた、という事実です。日本の少女たちの多くが肯定的に捉えているというのです。その差の大きさを何と考えればよいのでしょうか。

また、さきほどイタリアで日本女性数人がレイプされた話を出しましたが、二十年以上も前だったでしょうか、アメリカでは、レイプがとても大きな話題になりました。その時、アメリカはレイプ天国のような印象を受けたのですが、それは、一面的な見方になつていて、ヨーロッパや日本では、レイプしなくても、あのイタリアの犯人が言いましたように、和姦やフリー・セックスが成立しているということなのだ、思えてきました。

でも、アメリカもそんなに大きなことは言えないと思います。前の大統領の不倫問題がありましたから。

ところで、この毎日新聞の「米ここでも自国中心」という見出しのことですが、性倫理の復活を訴えたことを、自国中心主義という国家エゴ追求の現れと捉えている点で、とても問題だと思います。まさに価値が転倒しているのでしょうかありません。

民主主義は、かつてドリフターズのギャグに出てきましたように「赤信号、みんなで渡ればこわくない」という側面を、本質的にもっています。

この性倫理の復活の訴えは、まさにそれに当たっています。「性不倫、みんなで冒（おか）せばこわくない」ということです。民主主義では、あらゆる価値は、相対的になっています。つまり、数の論理が絶対になっているのです。それは、支持者の数であり、お金であり、力などです。それが、その時々相対的な絶対なのです。

仏教では、絶対な価値として五戒があります。・不殺生、・不偷盗、・不邪淫、・不妄語、・不飲酒、です。どんな時代、どんな国であっても、守らなければならぬ戒律（規範・倫理）です。それが、いまや、数によって相対化されています。そのことに、この記者も全く気付いていません。なんと嘆かわしいことでしょうか。

## 釈尊のごとば（一一一）

法句經解説

（三五四）教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる。妄執をほろぼすことはすべての苦しみにうち勝つ。

この偈は、現代の日本人には、ほとんど、いや全く通じない、まさに「教え」のように思えます。

なぜなのでしょう。

もう何度も書いてきたことですが、日本は明治初期に自らの手で千年以上も日本人の精神的バックボーンであった仏教を棄ててしまいました。ここでいう「教え」としての仏教を棄てたのです。そして、仏教の影響を強く受けてはいましたが、神道（復古神道）を日本の国教に据えました。それは、欧米のキリスト教に模して、天皇を万世一系の現人神として絶対化するというものでした。また、その具体的な道徳律として上下関係の秩序を極端に重んじる儒教を取り入れました。この神道の考え方は、未だに日本の政治家の心の中に強く残っています。その証拠に、前総理が「日本は天皇を中心とした神の国だ」と発言したことは、まだ記憶に新しいことだと思

ます。

日本は、この神道と儒教を柱として、「殖産興業・富国強兵」に邁進してきました。それは、いわば国家エゴの追求、ファシズムへの道でした。

しかし、それが、太平洋戦争敗戦で全て棄てさせられるという結果に終わりました。憲法にもありますし、教育基本法にもありますように、日本は決定的に「教え」としての宗教を、あらいざらい棄てさせられてしまったのです。こんなことは、世界に類を見ないことだと思えます。

こうして信じるものを失った日本人に、信じるべきものとして与えられたのが、アメリカをお手本とする「自由・民主主義」です。

これは思想のようですが、真の思想と言えるものではありません。何度も書いてきましたように、これは、私の言葉で言う「他己」の原理を全くもたない、単に「自己」を追求する制度に過ぎないのです。思想と呼べるものは、その中に必然的に「他己」を含まなければなりません。なぜなら、それが人間の人間たるゆえんだからです。人間が生きていくための指針となるべき思想は、必ず他己の概念が、そういう言葉ではなくても、含まれているものなのです。

戦後、日本人は、エゴ追求原理である「自由・民主主義」だけを信じて、世界の人びとから「エコノミック・アニマル」と呼ばれましたように、まさに動物並に、いや、それ以下に成り下がって、自らの利益（損得）と選好（好き嫌い）のみを追求してきたのです。

その結果、若者に顕著に見られますように、日本人のこころの荒廃を招いてしまいました。ここにいちいち指摘しませんが、多くの社会病理を生み出しました。規範性の喪失を招いています。いま、警察も刑務所も、犯人や罪人を留置する部屋が満杯で、逮捕しても入れる所がない、という状況が発生しています。しかも、五件に一件という低い検挙率ですらなのです。

この偈にありますように、ほんとうに「教えを説いて与えることはすべての贈与にまさり、教えの妙味はすべての味にまさり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまさる」のです。象徴的に言いますと、この「教え」が分かる人が一人でも多くなること以外に、日本の惨状を救う道はない、とさえ言えます。

偈の最後にありますように、民主主義的な自己追求への「妄執をほろぼすこと」が、日本人がいま抱えている精神的な「すべての苦しみにうち勝つ」道なのです。真の教え・思想は、自己への執着を棄てる中にあるのです。

後記

- 一、真夏を思わせるような暑い日が続いています。今年は水不足になるのでしょうか。
- 二、五月中旬に、タマネギを収穫しました。毎年、タマネギの種を一袋買って来て、苗床を自分で作り、できた苗を全部、植えています。今年も、昨年と同様に、たくさん収穫できました。
- 三、毎年なのですが、軒下につるしたタマネギから芽が出てしまい、食べられなくなります。今年は、それを畑に、再び植えました。出た芽をネギとしても食べましたが、ずっとおいておきますと、玉がぶんけつしてきて、一株に小タマネギが幾つかできます。それを収穫して、料理が面倒なのですが、食べています。とても、おいしいのに驚いています。もし芽が出て捨てるのがもったいないとお考えの方は、お試してください。
- 四、六月はじめ、さつま芋を植えました。それ以来雨が降らないのですが、たつぷりの水をやり、植えた株もとに新聞紙を切って置いていきますので、全部、活着しています。
- 五、カボチャは、健康を害する体内の活性酸素を処理するのによい働きをする、ということですので、今年はずっとたくさん植えました。実際に毎日、ニンジンと共に食べて

います。みそ汁に入れたり、煮つけたりしています。

六、最近、うこつけいが少し産卵率を上げています。この卵も健康によいということで、毎日、一個は頂いています。

七、実は、「卵」は健康によいということで、毎日、二〜三個、店で買ったものを頂いていましたら、血中コレステロール値が少し高くなり、やめていました。うこつけいの卵だとうなるか、実験しています。

八、五月三十日に、久しぶりに講演させて頂きました。徳島県阿波町の婦人会総会で「現代社会と家庭の役割」と題して、お話ししました。ありがとうございました。

月刊 こころのとも 第十三巻 六月号 (通巻 一五号)	平成十四年六月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（よ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

